子どもの生活と音楽(3)

プール遊びに見られる音楽的な熱中

藤田芙美子

六月号に引き続いて、こひつじ保育園〇歳児クラスの子どもたちの音楽的行動の質について考えてみたいと思います。先回は、保育園に入園して間もない、四月、五月の子どもたちの室内での音楽的な活動をとりあげましたが、今回は、七月と八月のプール遊びの活動をとりあげて、さらに成長した子どもたちの音楽行動に目を向けることにしましょう。

水面を叩いて、音と水飛沫を作り出す

一九九七年七月九日

このところ連日三十度に近い暑さが続いています。今日は、朝から園庭にビニールプールを出して、水遊びをすることになりました。四人の保育者たちは、プールにお湯をいれて、水の温度を加減したり、バケ

ツで水を汲み出して、水の高さを調節したり、子どもたち一人一人の発達に応じた、魅力的でかつ無理のない水遊びの経験ができるよう、準備に気を配っています。

しゅんたくん（十三カ月）は、今日がはじめてのプール遊びなので、プールに入る前に、バケツに汲んだ水で遊ぶことになりました。プールの傍らに座ったしゅんたくんは、初めは、バケツの水を手のひらでそっと叩いたり、両手を深くバケツの中に入れたり、プールの中で、じょうろの水を浴びている子どもたちを眺めたりしていましたが、次第にプールに身を乗り出して、水面を叩いたり、バケツの水を、右手、左手で交互に勢いよく叩くことに熱中しはじめました。保育者が「しゅんたくん、ジャー」と言いながら、じょうろで水をかけると、気持ちよさそうな表情で水の方に手を差し出しました。

頃合をみて、保育者がしゅんたくんを抱きかかえてプールに入れますと、先にプールの中にいた、しおりちゃんや、たいしくんと、しばらくは、コップやじょうろをとりあったりしていましたが、コップを一つ獲得すると、これを片手にしっかり持って、もう一方の手で水面を叩くことに再び熱中しはじめました。右手で叩くときは手首を使って五、六回をひとまとめに打ち、左手で叩くときは、大きく腕を上げて二回をひとまとめで、繰り返し打ちました。水面を叩くと大きく水飛沫があがり「パチャパチャ」と音がするのに大いに興味を示しているようで、水飛沫が顔にかかっても平気で何度もこれを繰り返しました。途中、プールの中を歩いてきた、しおりちゃんに倒されて、あやうく保育者にプールの外に助け出されるというハプニングがありましたが、すぐにプールに戻り、今度はもっぱら、右手で水面を打つことに集中しました。大体六回をひとまとめとして、これを何回も繰り返しましたが、長いときは、続けて十六回も打ちました。それを見ていた保育者が、片手でプールの水を掬って、しゅんたくんの頭や身体にかけながら、しゅんたくんの右

手打ちのテンポに合わせて「チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ、チャブ（七回）」「パチャ、……（六回）」「パチャ、……（六回）」「ジャブ、……（七回）」「ジャブ、……（三回）」「プチャ、……（五回）」と声をかけました。しゅんたくんは、このあと、左手でも、ひとまとまり八回から十回の速いテンポで水面打ちをしました。

☆しゅんたくんは、自分の右手、左手を使って水を叩くと、実に魅力的な音が出ること、きれいな水飛沫が上がること、その音や水飛沫を自分の意思で作り出すことができること、呼吸を調節することによって、これを一定時間続けて行うことができることを次々と発見し、この活動に没頭しました。保育者は、そのようなしゅんたくんの気持ちを感じて、思わずしゅんたくんの動作にあわせたリズミカルな擬音語で応じました。ひと呼吸に五回から六回で繰り返される右手打ち、左手打ちは、この年齢の子どもにとって安定した心地よいリズムなのでしょう。

月齢が最も高い、しおりちゃん（十四カ月）は、もうしっかりした足どりで歩くことができるので、プールの中でも、あちこち歩きまわって探索の対象と範囲を広げます。プールのそばに水を張った、たらいがあるのを見つけて、プールから乗り移ろうとしたり、保育者がしゅんたくんに「ジャブ、…」と声をかけているのを聞きつけると、そのリズムにあわせて両手で水面を叩き大きな水飛沫をあげたり、いっときも、じっとしていません。プールの中で、しっかりと両足を踏ん張って立ち、バケツに水を汲んでは高く掲げて水を流すことを繰り返し行い（続けて九回）、ダイナミックに流れる水を飽きることなく見つめているかと思えば、今度は、プールの中に座り込んで、両手にバケツを持ち、水を汲んでは自分にかけることを繰り返す（五回）といった具合です。この他にも、自分とぶつかってプールの外でべそをかいていた、しゅんたくん

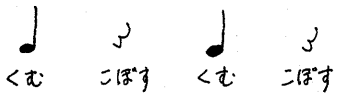
をあやすかのように、プールの中から「バァー」といって立ち上がったり、保育者からじょうろを受け取って、水を汲んではこぼす動作を繰り返したりの音楽的な行動が目立ちました。

たいしくん（十三カ月）は、じょうろを左手にもって、水面に何度も打ちつけていましたが、保育者が「たいしくーん、ジャーは」と言って、じょうろで水をかけると、両手を伸ばして水をさわりました。しおりちゃんも寄ってきて、両手を伸ばして水を受け、さらに両手を両側に振って水を飛ばしました。この二人は、じょうろのシャワーが大好きで、このあと何度も水を浴びました。たいしくんは、保育者がプールの中に入れたコップを目敏く見つけて、コップに水を汲んではこぼすという動作を、一定のテンポで何度も繰り返しました。

☆この日、たいしくん、しおりちゃん、しゅんたくん、そして他の子どもたちは皆、まず水面を手のひらで叩くことを繰り返しました。右手で叩き、左手で叩き、そして両手で叩きます。時には片手で水面を左右に引っ掻きます。水面を叩くとピチャピチャと音がするだけでなく、水飛沫が上がります。じょうろで頭から水をかけてもらうと、これも水飛沫がとてもきれいです。思わずその水を掴みたくなるのでしょう。たいしくんも、しおりちゃんも立ち上がって両手を差し出し、水を受けようとしました。

コップやじょうろに水を汲んではこぼす、という動作を繰り返す行動も目立ちました。汲む→こぼすという動作は、一定のリズムで繰り返されます（図1）。子どもたちは、コップを水面に打ちつけると広がる波紋、音、そして水をこぼすときの水飛沫の形と音を、

図1　水を汲んではこぼす動作のリズム



自分の身体を使ってさまざまに変化させ、バランスよくまとめることを楽しんでいました。同じ動作を繰り返して行うのは、動作を繰り返す度に出現する、少しずつ違った状況を、視覚的に聴覚的に確認し、その変化を楽しむと同時に、より心地よい造形的、音響的なまとまりを作り出そうとしているからと感じさせられました。

擬音語の発声にあわせて動作する

一九九七年八月十三日

お盆休みのせいか、欠席の子どもが多く、今日は、しおりちゃん、れいくん、なおとくんの三人だけでのプール遊びになりました。

前述の七月九日のプール遊びでは、プールの中に入ることはもちろん、プールの外での水遊びも嫌がって泣き叫んでいた、なおとくん（十四カ月）が、今日はプールの傍らで、バケツ一杯の水で機嫌よく遊んでいます。保育者が「なおピ、ジャブジャブは？ ジャブ、ジャブ、……」と声をかけると、先生の声にあわせるように両手でバケツの水を叩きました。このあとも、バケツの水をじっと見つめて「A・A・a」「Umida」とつぶやいたり、バケツの水をコップに汲んではこぼすことを繰り返したり、バケツの水をひっくり返して水を流し、出来た水たまりの水を指でつまんでバケツに入れたり、水の探索に熱中しました。

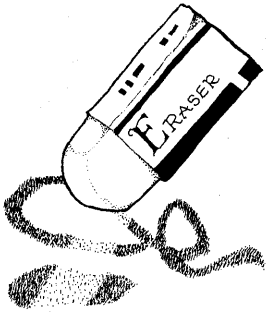
しおりちゃん（十五カ月）は、活発な発話が目立ちました。バケツでプールの水を汲もうとしてバケツを水中で前後に揺らして「da - da -」と言い、「u・Da -」と声を上げると同時に立ち上がって、勢いよく水を流します。遠くで「しょうちゃーん」（しおりちゃんの兄の名前）と呼ぶ声を聞くと、「Sho cha」とつぶやき、持っていたじょうろを落とすと、じょうろを指さして「A」と言って先生を見上げます。「hai」と言ってバケツやじょうろを保育者に手渡す場面も見られました。

しおりちゃんは、保育者が話しかける言葉の意味

を、以前より正確に理解し、反応するようになりました。保育者が「ドォー」と言って、高い位置からバケツの水を流すと、両手を差し出して水を受け、保育者が「もう一回?」と聞くと、「Un」と言って頷き、今度は自分の背中を水に向けます。その様子を見て、保育者が「修行してみる?」「修行!」と言って、しおりちゃんの頭から水をかけると、腰をかがめ、うつむいて、じっと動かずに水を浴びました。その姿は、滝にあたって修行する僧のようで、微笑ましいものでした。しおりちゃんの日常の行動と性格をしっかりとらえている保育者だからこそ、このようにユーモアのあるやりとりが生まれたのでしょう。

☆今日のなおとくんは、水の属性の研究に余念がないといった活動ぶりでした。バケツの水を叩く、揺らす、流す、つまむといった具合です。

二人の保育者が、各々に子どもの活動をしっかり見つめて対応していることも印象的でした。じょうろの水をかけるときは「ジャー」「ジョー」、バケツの水を流すときは「ドォー」と、水の流れ方にぴったりした擬音語で子どもたちに語りかけます。しおりちゃんがバケツの水を流しながら「Da-」と言えるようになると、その発話のリズムにのって「Da-」と答えて共感を示し、しおりちゃんが「Hai」といってじょうろを渡すと、「ハイ、どうも」と、しおりちゃんの持ち出した言葉を繰り返して応答します。保育者が、子どもと水遊びを心から楽しんでいるからこそ、このような共感のやりとりが出来るのでしょう。



息をあわせて応答する

一九九七年八月二十日

一週間ほど曇り日の涼しい毎日が続いていましたが、今日はまた真夏日が戻ってきました。朝から日差しが強いので、登園間もなくからプール遊びをすることになりました。子どもたちは、プールに入ることに大分慣れたようです。直径一・三メートル程のビニールプールは七人の子どもたちが次々と入って満員です。子どもたちは、しばらくは、お風呂に入っているような表情でじっとしていましたが、間もなく水面を叩いたり、じょうろに水を入れたりの活動を各々にはじめました。

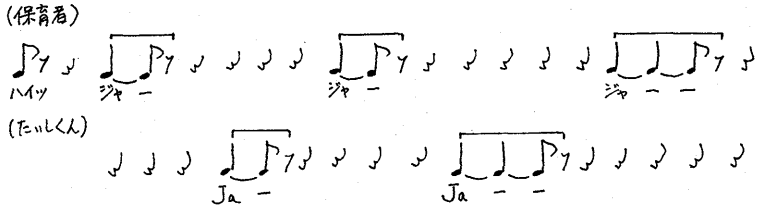
たいしくん（十四カ月）は、この日、自分から「Ja-」という擬音をしっかりとした発音で何回も発話しました。保育者がプールの中に座っていた、たいしくんに、高い位置からじょうろで水をかけながら、「ハイ、ジャー」と言うと、たいしくんは、元気に右手を上げてじょうろの水を受け「Ja-」と、はっきりした発音で答えました。観察期間中、たいしくんが「ジャー」という擬音語を発話したのは、八月六日のプール遊びが最初で、今日は二回目です。たいしくんの「Ja-」に呼応して保育者は、再び「ジャー」と言いました。たいしくんが一息で言いきった「Ja-」と同じ呼吸の長さで、すなわち、同じテンポで発声しています。たいしくんは、今度は両手を伸ばして、じょうろの水を受け、少し息を長くして「Ja--」と言います。すると保育者はたいしくんの息の長さにあわせて「ジャーー」と答えます。たいしくんと保育者の声のピッチはだんだんに合ってきます（図2）。たいしくんは、そこで立ち上がって、保育者の方に近づこうとしますが、そのたいしくんに保育者は「自分でやってごらん、ジャーって」と言って、じょうろを渡します。たいしくんは、いったん座って、じょうろに水を汲み、また立ち上がって、右手にじょうろを持ち、それを傾けて左手で水を受けます、そんなたいしくんに

向かって、保育者は再び「ハイ、ジャーー」と言いながら、じょうろのシャワーをかけますと、たいしくんは、持っていたじょうろを放り出して、両手を上げてシャワーの水を受け、タイミングよく「Ja - -」と答えました。そして今度は、「Ei」と言って、保育者に向かって手を伸ばして近づき、「e・e・ei」（「ちょうだい」と言っているように聞こえる）と言いながら保育者からじょうろを奪いました。たいしくんは、このあとも、プール遊びをする中で、じょうろを傾けながら「Ja -」を一回、「Jo -」を二回発声しました。「ジャー」という擬音語を確実に習得したプール遊びでした。

☆たいしくんが、保育者と応答して「ジャー」という擬音語の発声を、より確実なものにしてゆく過程は実に感動的でした。じょうろの水が流れる様子が「ジャー」だと、気持ちを高揚させて発声するたいしくんと、その気持ちをしっかりと受けとめた保育者との応答は、お互いの呼吸を合わせて作り出す拍節にのせて、各々の気持ちを「ジャー」と唱える声に託し、確認しあい、よりバランスのとれた音声表現に作り上げる喜びに満ちたものでした。互いに響きあうとは、こういう応答をいうのでしょう。

○歳児クラスの子どもたちのプール遊びは、先回とりあげた室内遊びにも増して、子どもたちの周囲には実

図2　たいしくんと保育者の応答



に魅力的な音の世界、造形の世界があることを私たちに教えてくれるものでした。自分の身体を使い、知恵をめぐらして、水に関わり、音を、形を作り出すことに熱中する〇歳児クラスの子どもたちは、それが、まだおむつもとれない、ことばも獲得しはじめたばかりの乳児たちであることを、しばし忘れさせるほど、主体的で、問題解決を成し遂げる力に溢れていました。

プール遊びには、子どもたちが水と関わって作り出す音を、さまざまな擬音語で表現する、保育者のリズミカルな語りかけがちりばめられ、日本語の文化には、こんなにも多彩な擬音語があったのかと驚かされるほどでした。そんな中で、子どもたちは、保育者と呼吸を合わせて共有する時間を作り出し、動作や音声をリズミカルにまとめる方法を確実に学んでいました。

私は、幼児期の子どもたちが、日常生活の中で、頻繁に擬音語をリズミカルに唱えること、そして、この傾向は、年齢が低いほど、顕著であることを、これまでに行った、一歳児クラス以上の年齢の子どもたちの音楽行動の観察を通して知ってはいましたが、ほかの言葉に先立って、何故擬音語なのかについては、よくわからないでいました。今回、〇歳児クラスの子どもたちの音楽行動の実際を追ってみて、子どもたちが、いち早く擬音語を獲得し、これを好んで用いるのは、この年齢の子どもたちが、音を聞いたり、自ら行動を起こして音を作り出すことに熱中するので、周囲の大人たちが、そのような子どもたちの音づくりに時間的な秩序を与える擬音語を豊かに用いて語りかけ、子どもたちの活動を励まそうとしているからにほかならないことを知りました。保育者と子どもたちの親密な相互交渉には、お互いの文化を共有し、確認しあう、文化の伝達の本来的な姿があると思いました。

（国立音楽大学）